
優しい日々（とき）を忘れて

仁科柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい日々（とき）を忘れて

【Zコード】

Z5274E

【作者名】

仁科柚希

【あらすじ】

”世界中でたった1人”的番外編。本編を読んでいなくても平気なように一応したのですが、分かりにくかつたらごめんなさい。

(前書き)

少しども楽しんでいただければ幸いです。

「パパ、遅いね～、リーチちゃん。今日はリーチちゃんの誕生日なのにね。全く、何してるのかしら」

母親らしき若い女性が幼い少女、自らの娘に声を出す。

「ママ、もうリーチちゃんねむい」

少女は眠そうに皿をこする。

それもそのはず、時計は9時を過ぎようとしていた。

今日は、母親がケーキを作るのを手伝って、ワクワクしながら3本ローソクを立てて、テーブルにならんでいくつも皿を輝かせていたから、少女はお昼寝もしていない。

今日3歳になつたばかりの幼子には大変な夜更かしだ。

眠そうな少女と、すっかり冷めてしまつたテーブルの上の料理を見て困つたように女性は言った。

「そうねえ。もう今日は寝る？」

「ううん。パパまつて。がんばって、おきて、まつて。あつとパパはママとリーチちゃんのためにがんばつておじいとじてるから、りーちゃんもがんばつておきてる」

今にも寝てしまいそうな調子で少女はこたえる。

「そう? もう今日は残業はしないで、寄り道もしないで、まつすぐ家に帰つてくることつて言つたのに。分かつたよつて言つたくせに。もう、パパつたらいつもこうなんだから」

怒つたように、そしてどこか呆れたように女性は言った。

そうして、時計の針が10時半をさし、少女がソファの上ですつかり眠りこんでしまつたころ、漸くチャイムが鳴つた。

「「」めん。本当に「」めん」

帰つてくるなり男性は言つた。

「今日は、早く帰つてきてつて言つたじゃない、あなた。もう、

「一体今までどこで何してたのよー！」

もちろん、あなたは社長で、仕事も大変で、忙しいっていうのは分かってるわ。でもね、大事な大事な1人娘の誕生日だつていうのに、また仕事優先なの？！」

怒り心頭といった風情で女性は文句を言つ。

「紅理へのプレゼントを・・・・探してたんだ。誕生日に慌てなくて済むように随分前に買っておいたんだけど、でも保管場所に困っちゃって。家に置いて红理に見つけられたら困るだろう？だから迷った末に社長室に置いといたんだ。

だけど・・・・どこでどうしたのか色んなものに埋まつてどこにあるのかわからなくて、それで今までずっと探してたんだ」

そう言う男性の手には、人形の箱があつた。今とても人気で、どこの店でも売り切れ必死の中々手に入らないものだ。

でも少女はとても欲しそうにしていたのだ。

「パパ、おかえりなさい。おじことおわつた？」

父親が帰ってきたことに気付いて起きたらしい少女がとてもとても眠そうな顔で言つ。

「終わつたよ。今日はごめんね、紅理。お詫びに今度、みんな一緒に遊園地にでもいこう」

男性は少女を抱っこしながら言つ。

「ほん・・・とう？」

父親の提案を聞きとてもとても嬉しそうな顔をして、そのまま少女は寝てしまった。

「あ、そういえば紅理に誕生日おめでとうって言ひの忘れた」

少女をベッドに寝かしながら男性は言つた。

「そういえば私もだわ」

女性もたつた今気が付いた、という口調で言つ。

2人はしまつた、という顔をして互いの顔を見合わせたが、相手の顔が可笑しくて笑つてしまつた。

少女は写真を見つめていた。

3歳になつたばかりで遊園地に行つたときの写真。父も母もいて幸せそうに微笑つている7年前の少女。少女は優しくて、幸せで、そんな風に過ぎていった日々を思い出す。懐かしい写真に引きずられるようにして、決して思い出したくなどなかつたのに。

思わず緩みそうになる涙腺を何とかして普通に戻す。

そして、写真を少女は破つた。

忘れる。そうしなければこの家で、この世界で生きていくことなどできないから。

忘れる。あの日々を忘れて。

自分たちを顧みることをいつのまにか忘れてしまつた父親が父だとうことも忘れて。

優しくつて、あつたかくつて、幸せで、これからもそうだ信じていた、疑いもしなかつた日々を忘れよう。

封じよう。

もうあの頃のあどけない幼子にはどうしたつて戻れないのだから。

そうして少女の手によつて写真はごみくずになつた。

捨てられることが決まったアルバムが積み上げられていく。あの日々の幸せの残り香。

全てを忘れて。

願いも。

想いも。

祈りも。

何もかもを。

心の奥底に封じて。

全てを封じた少女は空虚な表情^{かお}で笑つて、無理をし続けた。

それは願いを叶えるためだつたのに認めることができなくて。心は歪^{ひず}み感情は死んでいく。

やがて少女の視界は紅く染まる。どこまでも不吉な禍々^{まがまが}しい紅で。その時何かが自分の中で壊れてしまつたことさえ気付くことはなくて。

それが願いだつたことなどちつとも気付くことはできなかつた。完璧に封じることはできなかつた願い」と。

自分の願いが永遠に叶わなくなつたことに絶望したことにも気付くことはなく。

壊れた心で少女は2度と戻らない日々^{とき}を夢見る。

2度と戻りはしないと痛いくらいに知つていたから、無意識だつたけれど。

時の流れは残酷で慈悲なビトカケラも入る余地はないのだ。願いも想いも祈りも全てをさらつて過ぎ去つてゆくのだから。

ねえ、もう一度笑つてよ。あの日と同じ顔で、同じように幸せそうに笑つてよ。

もう一度、紅理つて呼んでよ。

そしてもう一度、あの優しかつた日々^{とき}をもう一度。あの幸せな日々^{とき}の幻でいいから、一瞬でいいから、

どうか見せて。

(後書き)

分かりにくかつたら本当にすみません。

少し説明をするとこの話は本編より前のお話です。

本編では主人公の名前は出せなかつたので初公開です。

片瀬紅理ちゃんといいます。

まさかあんなことをするとは作者の私も思わなかつたので（おかげでものすごい速さで終わつてしまつました、）色々と出せずじまこの設定があります。

このまま闇に葬るのはどうしても納得がいかないのでこのような形でも、少しずつ出していけたらと思います。

最後まで（こんなくだらない後書きまで）読んでくださいありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274e/>

優しい日々（とき）を忘れて

2011年1月27日14時42分発行